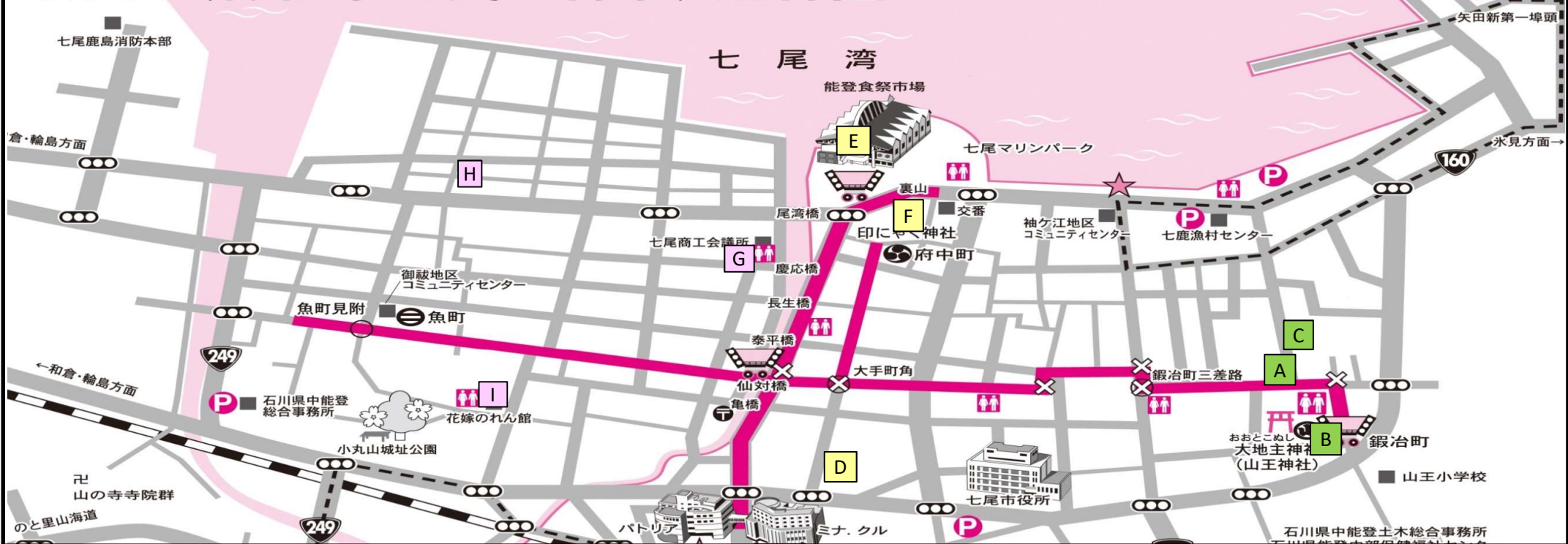


# でか山（青柏祭の曳山行事）運行図（予定）



人形見・人形宿（5月2日） でか山出し物の解説 出崎 哲弥（竹多文学賞・赤羽萬次郎賞入賞） 【お問い合わせ】七尾市産業部商工観光課 電話0767-53-8424

## 源氏物語 七尾の栄

- ① 畠山 義総（郡町/新村 慶太）
- ② 光源氏（山王町/山王奉賛会）
- ③ 紫の上（郡町/西部会館）

### 鍛冶町

「咲かせてみたいものよ、都に負けぬような文化の花を」光源氏、紫の上らが織りなす『源氏物語』の雅な王朝絵巻。そこに思いを馳せながら、畠山義総は夢見のだった。畠山義総が能登畠山家の七代当主となったのは、永正12年（1515）。名君義総の下で、七尾は北陸屈指の城下町と評されるまでに栄える。青年期、義総は将軍・足利義種（よしたね）の側で仕えた。洗練された文化への親しみがこの頃深まった。文芸、特に『源氏物語』を好んだ。すすんで学者から講義を受けるほどだった。能登の守護職に就いてからは、積極的に都の文化を取り入れた。茶の湯に伴って、多くの名画も七尾にもたらされた。義総の治世七尾に生まれた長谷川等伯が、長じて桃山画壇で無二の存在となる。義総が咲かせた花の一輪と云っていい。

## 前田利家 小丸山城入城

- ④ 前田 利家（大手町/ブティックミュール）
- ⑤ お松の方（府中町/道の駅 能登食祭市場）
- ⑥ 前田 利政（府中町/印鑰神社社務所）

### 府中町

「七尾の、そして前田家の新たな時代が始まるのだな」正室・お松の方、幼い次男・又若丸らに語りかけながら、前田利家は晴れ晴れと城下を眺めた。天正10年（1582）、完成を見た小丸山城に、前田利家は入城した。その前年、主君・織田信長から能登国を拝領して、利家は七尾城主となった。しかし、山城の七尾城は、戦には適しても、城下の統治には不都合が多い。そこで港に近い小丸山に平山城を新たに築いたのである。山城から平山城へ——城取りの変化は、そのまま時代の変化を象徴するものだった。入城から一年で、利家は金沢・尾山城へ居を移す。それでも初めて実質的な国主となった地、七尾への思い入れは強かっただろう。元服した又若丸は、前田利政を名乗った。関が原の合戦への対応を盼められて改易となるまで、利政は小丸山城主を務めた。

## 大阪軍記血判取

- ⑦ 徳川 家康（三島町/金刀比羅神社）
  - ⑧ 木村 重成（桜町/桜町会館）
  - ⑨ 本多佐渡守（馬出町/七尾市中心市街地 観光交流センター寄合いぬみそぎ）
- 「血判が薄うございます。大事な誓紙、どうぞ擦し直しを」臆する様子もなく、木村重成は家康に迫る。若侍の豪胆さに、本多佐渡守は徳川方諸將は舌を巻いた。慶長19年（1614）、大坂冬の陣で堅固な大坂城を攻めあぐねた徳川家康は、大坂方に和睦を持ちかけた。豊臣秀頼の正使として茶臼山本陣へ乗り込んだ木村重成は、家康と対面する。毅然とした大坂方の姿勢に、秀頼、淀君の待遇を家康は誓紙で保証した。交換条件は、大坂城外堀の埋め立てだった。ただ家康と参謀・本多佐渡守にとっては、大坂方が和睦に応じたというだけで事足りた。外堀を埋めると、強引に内堀へと工事を進めたのである。天下の巨城が無防備な姿を晒した。和睦からわずか五ヶ月後、大坂夏の陣は起きた。屍を重ねる大坂方。木村重成も激闘の末討ち死にした。大坂城は、ついに最期を迎える。

### 魚町